
坂道の効果に関する最新知見 ~ 女性研究者を対象として ~

良崎 歡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

坂道の効果に関する最新知見 ～女性研究者を対象として～

【Nコード】

N7852X

【作者名】

良崎 歓

【あらすじ】

まるで均したかのようにまっ平らな世界。幼なじみで天才女性研究者のベルルックに思いを寄せる青年、グロット。こちらはさえない研究者だ。仕事に詰まり元気の無いベルルックを励ますためにグロットが考えたのは、「坂道」作りだった。自サイト「SIREN」からの転載です。

坂道の効果に関する最新知見 く女性研究者を対象としてく (前書き)

原稿用紙換算17枚。

粗がありますが、気に入っているお話です。

坂道の効果に関する最新知見　く女性研究者を対象としてく

カードをかざすと、ドアが音もなく壁に収納されていく。部屋に踏み込んでから振り返れば、いつの間にかドアは元通りに閉じていた。

中では、疲れ切った様子の女性が一人、デスクに向かっていた。見慣れた光景、普段とそう変わらぬ彼女の姿のように感じる。

「あいかわらずだね」

「ああ、グロツトか」

ベルルックはおれの声で初めておれの存在に気付いたようだ。大儀そうに片手を上げ、気だるげに応じた。

幼なじみに対する挨拶にはあまりにひどい。扱いの悪さを抗議しようかと顔をしかめたおれは、ベルルックの姿を見て出かけた言葉を飲み込んだ。

まるで覇気がない。もともと小柄な彼女の体はさらに小さくなったようだ。ゆっくりと上げた彼女の顔色はあまりに青かった。目の下にはくつきりとくまが浮かんでいる。

おれとベルルックは何の因果か、生まれた病院から学校、果ては仕事までが一緒。

しかし、二人とも研究員という肩書きをもらっているものの、これまでの経歴はまさに天と地。もちろん彼女が天だ。ベルルックは驚異的な速さで我が所の稼ぎ頭となり、今では研究成果や論文数など、おれとは比べるべくもない。昔から成績優秀だった彼女の能力は遺憾なく発揮されており、本人もその楽しさややりがいをいたく気に入っていた。

それが、ここしばらく、調子が悪いらしい。そう聞いてご機嫌をうかがいに来たわけだが、これは思っていたよりも重症かもしれない。

結局、おれの口からは無難なせりふしか生まれなかった。

「今度は、もう少し早く気付いてよ」

「悪い。やや、疲れているらしい」

「かなり疲れてる、んだよ」

「ん？」

「だって見るからに辛そうだし」

「ん」

表情に乏しい顔で首を縦に動かし、微妙にニュアンスを変えて同じ音を繰り返す。

「研究、行き詰まってるわけだね？」

「そのようだ」

ベルルックは他人ごとのようにつぶやくと、椅子に深く沈んだ。

初めてぶち当たるであろう壁の前にもがく姿は、痛々しかった。

伸ばしっぱなしの長い髪をまとめる努力は放棄したものと見える。

足下のサンダルベルトは切れかかっているし、よれよれの服はこの前会ったときと同じもの。ベルルックが身なりに気を使わないのは確かにいつものことだが、ここまでひどくはなかったはずだ。

ならば、と、つとめて明るく能天気におれは持ちかける。

「ちよつと息抜きしない？ 少し時間貸してくれないかな」

「そんな気分じゃない」

「だから、その気分を転換しようって言うてるんだよ」

「それは一理ある」

彼女は唇をまるで引きつらせたように歪めてみせた。笑ったつもりなのだろうが、とてもそうは見えない。

「坂道、って聞いたことはある？」

「知らないな」

「そうだろうね」

うなずいたおれに、ベルルックはややむっとした様子だった。国内屈指の研究者という自負があるだけに、彼女は、他人は知っているが自分が知らない物事にはえらく敏感だ。未知の情報への食いつきがすこぶるいい。だからこそこういう釣り方、いや話の振り方が

できる。

「で、何だ。さかみち、とは」

「道がね、こう」

そう言いながら、右手を、左上から右下へ大きく動かす。

「斜めになってるんだよ」

「意味が分からない」

「しゃべってるよりさ。実際、研究室に作って見たんだけど、どう？」

ベルルックは無言で立ち上がると、おれの先に立って部屋を出る。たとえ口を尖らせていても、それまで表情がほぼ皆無だったベルルックの瞳が輝きだしたことが、おれには嬉しかった。

おれが籍を置く研究室、こっちの棟は旧式のセキュリティが標準で、彼女がいる建物と比べるとかなり見劣りがする。ロックの解除にはやや時間がかかるので、ベルルックと何気ない立ち話をしながら間を持たせる。

「今は、過去の絵図を解いてるんだ」

「そっちは順調そうで、結構だな」

「いいや、進みは微々たるものさ。きみが早すぎるんだよ」

「普通だが」

暗に休めと言ったつもりだったのに、全然通じていない。彼女はいつもそうだった。これまで、この鈍感さに何度痛い目を見、そしてある意味では助けられてきたことだろう。だからこそ、おれの立ち直りも早い。

「昔は、この辺の土地もずいぶんデコボコしてたらしいよ。地形が劇的に変わったのは、やはり先の大戦によるところが大きいみたいだね」

おれの専門は古代史だ。

おれ達の住む大陸の特徴は、まるで均したかのようにまっ平らなことだ。

調べたところによると、この世界はもとも起伏に富んだ地形だったらしい。つまり坂道は、大昔にはこの世界のどんどこでも見ることができたのだ。しかしそれが、過去の大きな天災や人災により、今のようになだっ広い平野に姿を変えたことが分かった。

「先人たちも、ずいぶんと余計なことをしてくれたものだ」

吐き捨てるように、ベルルックは言った。おれは、穏やかならぬ発言を慌てて返す。

「はつきり言い過ぎだよ」

「言うべきだろう？ 大地は尊い財産だ。人間の都合で、軽々しくえぐったりしていいものではない。少なくとも私は、常にそう頭に置いて仕事をしている」

ベルルックの、研究者としてのスタンスが見えた言葉だった。

彼女の専攻は都市工学。彼女はある種の正義感を持って、おれ達の住む、どこまでも平らな国土の効率的な利用方法を考え続けている。

そんな彼女でさえも知らない、坂道。

それはそうだ。おれ以外にこのことを知っているのは、おそらくおれと一緒に古い文献に当たってくれた同僚達ぐらいのだから。これでおれの株も少しは上がるだろうかと、ほんのひとしずつ程度の下心を抑えながら、ようやく開いた扉の向こうを手で示す。

「これが、坂道だよ」

研究室の真ん中にどっしりと鎮座する『坂道』の実物大モデル。気分転換と言って連れ出したわりには大げさな舞台装置だと、我ながら思う。設置スペースは、同室のみんなの了解を得て、デスクを部屋の隅に寄せてひねり出した。

坂という部分だけをこうして切り取ると違和感はあるが、実際に周囲の景観も含めて見てみると、なかなかどうして、自然な地形に無理せず合わせた美しい形なのだ。向かって右手側はだらだらと長く、傾きが小さい。一方、左手側は登るのが少々大変そうな急傾斜上から覗き込めば、吸い込まれそうなくらいの角度だろう。

そのスケールに驚いたのか、初めて目にする坂道自体がインパクトがあつたからなのか、さすがのベルルックも部屋の入り口で足を止めていた。

「すごいな。なるほど、斜めだ」

ベルルックの顔が今日初めて緩んだ。

「だろ？ 実在したやつをそのまま作つてみたんだよ。昔は、こういう坂を駆使して街が作られてた。土の下にも上にも、そして空にまで道が続いてたんだ。空中や地下で道路が交差したりとかね。限られた陸地を合理的に使う、うまい方法だと思うよ。昔の人たちはすごかつたんだね」

そんな説明の間にも、彼女は坂を見上げてみたり、傾斜に合わせて顔を傾けてみたりと落ち着きがない。いろいろと苦労して作り上げたかいあつて、ベルルックからはそれに見合つた反応はもらえそうだった。

「わずかな昔の資料から、当時の様子を推測できたんだ。でも、いちばん骨が折れたのは、アスファルトとかいう旧時代の舗装材を手に入れることだったかな。他の部分に使う資材は現代のもので代用できるんだけど、走つたとき足が押し返されるようなあの感触を得るためには、それがどうしても必要で」

「まるで見てきたような口振りだな、グロツト」

雲行きが怪しいぞ、と思つたときにはすでに遅かつた。

「まさか、過去で見てきたとは言つまいな？」

ベルルックから核心をつく言葉が飛び出してきて、おれは思わず彼女から目をそらした。しかし、そんなことで追求が止むはずもない。たちまち硬い表情に逆戻りして、彼女はまくしたてた。

「時間を飛ぶのは法律違反だろう？ だいたい、今となってはほんの数点しか現存しないような古文書から、これほど精密な復元ができるわけがなかったな。もっと早く気付くべきだった。これは問題だぞ、グロツト」

過去へ行つたのは確かに事実で、反省はしている。しかし、言い

訳になるが、歴史を操作するようなことはしていないし、そうするつもりもまったくなかった。まあ、あの場に居合わせた人たちからは、坂を何度も上り下りする怪しい人物、とは思われたかもしれないが。

「ちよつとくらい悪いことをしてでも、これを作りたかったのさ」「研究とはいえ、そこまでする気持ちは理解できかねるな」

ベルルククは不審げにおれを見返し、ため息を一つついた。

彼女に坂道を見せたいという一心だったのだが、案の定通じてない。もつとも、研究のためじゃないと言ったとしても、こちらの本当の意図をくみ取ってはくれないだろう。

だからといってすぐにフォローのための名言が浮かぶわけもない。おれはとりあえず、当初の目的を果たすことにした。

「責めは後で負うよ。さて、じゃあいちばん上まで行ってくれる？」「どうしてだ？」

「坂道の最大の効用を、きみに教えたいんだ」

まだ不満そうなベルルククを、騙されたと思って、とうながし、右手側、つまりならかな方から登らせた。渋々ながらも思えたが、ふらつく足で、それでも彼女は頂に立つてくれた。下で待つおれを見下ろし、「次はどうするんだ」と尋ねてくる。

「こつちに、走って下りてきて欲しい。全力で」

勾配の大きい左側の坂の下から、おれは声を掛けた。彼女は一度その傾斜を確認したのち、首を振った。あいかわらず青白い顔には、らしくない薄笑いが浮かんでいた。

「駄目だ。無理に決まっている。きつと、足がもつれて無様に転ぶだけだ。今のわたしには、できない。できる気がしない」

ベルルククは消え入りそうな声で呟くと、深くうつむいた。束ねられていない髪の毛が揺れて、彼女の表情を隠してしまう。しかし、ベルルククの肩が震えているのは、下にいるおれのところからさえも見て取れた。

気分転換だなんて、軽い言葉で済ませられるような状態ではなか

ったのだろうか。彼女の心は、おれの思いつきなんか何の役にも立たないくらいに疲弊しきっていたのではないのか？ 回復なんか見込めないほど、ぼろぼろだったんじゃないのか？

おれがもつと頼りになったなら、ベルルックを支えることができるような存在であつたならと、おれは唇を噛んだ。

坂道の復元は、しがない研究員であるおれにできる精一杯だつた。過去に行くという思い切つたことができたのも、彼女のことを思えばこそだつたのだ。例えレベルが違つたとしても、同じく研究で食つているベルルックなら、おれが坂道に掛けた思いは伝わるはずなのに。

おれは首を思い切り上に曲げ、叫んだ。

「好きなものに向かつて突つ走つて行くベルルックがいいんだ。転んだつて胸張つて、さつそうと風を切つてくきみが！」

息が足りなくなり、深呼吸。そこまでしか言えない自分の臆病さを呪いながら、おれはその場にへたり込んだ。

しばらくの沈黙ののち、カサ、という衣擦れで、おれは我に返つた。坂の上では、ベルルックがわずかに体を起こしたところだつた。ゆっくりと立ち上がり、よれよれの服の袖で目を乱暴に拭つ。そして、下り坂の先にいるおれを見据え、顎を引き、叫んだ。

「そんなに言うならよく見ている、グロツト！」

次の瞬間、ベルルックは何の前触れもなく飛び出してきた。急な坂道を、一気に駆け下りる。彼女の体に見合つた軽い軽い足音に合わせて、髪がなびいた。そんな中でも、力強さがにじむ鋭い視線が、おれを真つ直ぐに捉えていた。

「だめだよ、ちゃんと足下を見ないと！」

おれと目が合つた瞬間、案の定、彼女は転んだ。きゃあとか何とか、意外に可愛らしい悲鳴を上げながら、ベルルックは坂を文字通り転がり落ちてくる。とつさに落下地点へと動いたおれにぶつかりながら、彼女はおれもろとも研究室の硬い床へと倒れ込んだ。

「べ、ベルルツク？」

「は、はは、はははははは」

返事の代わりに飛び出したのは笑いだった。いかにも楽しげな感情が乗った、からりと乾いた声だった。

通常、声を出して笑うことなどめつたにないベルルツクのけたたましい声に、変なところを打ちでもしたのかと思つたが、心配は無用だった。ひとしきり笑つて満足したのか、彼女は突然真顔に戻り、けろりと言う。

「道を斜めにするとは斬新だ」

「斬新、つて。古い文献に載つてたんだよ」

「新しいさ。気鋭の研究者である私が言うのだから、間違いない。道が傾いていてもいいなど、私の中にはそんな常識はなかった」

言い切ると、片頬だけを動かしてにやりと笑う。

「それに、爽快だ。実に爽快だな。すばらしく気分がいい。これがお前の言う、坂道の効用か？」

泣いて転んだのが功を奏したのか、はたまた思い切り笑つたからなのか。彼女は何か吹っ切れたような表情で、早口で続けた。自信に満ちあふれた調子は本来のベルルツクらしい喋りだ。

思惑通りの展開になつて本当に良かったと、おれは胸をなで下ろした。過去に飛んだおれがいちばん感銘を受けたのが、初めて坂道を駆け下りたときの妙な高揚感だった。あの鼓動の高鳴りを彼女にも味わつて欲しい、という目標は、どうやら達成されたようだ。

「その顔を見ると、少しはすつきりしたのかな？」

「うむ。その、何だ。一応、感謝はしている。いいや、一応ではなく、多分にな。しかし、法律違反の件と相殺で借りはなしだぞ」

おれの問いかけに、ベルルツクは不自然に口ごもりながら、ぼそぼそと答える。今こそ攻勢に転じるとき、そう読んで、おれは重ねて尋ねた。

「もう一回落ちてきてよ。今度は受け止める準備、万端にしとくから」

「あんな恥ずかしいこと、二度とやれるか！」

ベルルツクは頬を染めたかと思うと、よくわからない捨てぜりふを残し、猛烈なスピードで部屋を出て行った。

遠回しな言葉も、今回はちよつとだけ効いてくれたらしい。おれと彼女の間にある坂を登り切るまでには、どれくらいかかるのか。いつか二人で駆け抜きたいものだと、おれは苦笑しつつ斜面を見上げた。

県道286号の男(前書き)

おまけです。

グロットが坂道を調べに行った先での小話。

県道286号の男

自転車を引いて、長く細い坂道を登る。

ずり落ちてくる自転車を支えながら、僕は坂道を見上げた。通路で一番の難所のでっぺん、歩道のご真ん中に立つ男の背中。彼はいつも僕が一休みしている場所を、仁王立ちで占領していたのだ。

彼自身は立ち止まった僕には気付く様子がない。神妙な顔でうなずくと、こちらに背を向けたまま坂道を下りていった。と思うと再び戻って来る。そんな奇行を、彼は少なくとももう七度は繰り返していた。彼が上り下りしている側は、僕が時間を掛けて登ってきた方とは比べものにならないほどきつい坂にも関わらず、だ。

一人で坂道ダッシュの修行なのか、坂道学会の会員か。はたまたただの坂道マニアか、単なる変態なのか、人生経験浅い高校生の僕には判断が付かない。ただ、この人がやばいというのは判る。

最初のうちは声をかけて避けてもらおうかと思っていた僕も、さすがに五度目を確認したあたりからは、ここは諦めて引き返すという選択肢へと傾きつつあった。彼の十度目の下山が始まったのを機に、僕は自転車を方向転換させるべく、ハンドルを握る手に力を入れる。

男の悲鳴が聞こえたのは、ちょうどその時だった。

「うわああ」

妙な声を上げ、男は坂の向こう側へと消えた。

自転車をその場に放り、慌てて様子を見に行ってみると、ごろごろと、きれいに回転しながら小さくなっていく彼の姿が目に入った。やがてそのまま坂を下りきり、両手を投げ出した状態で、男は動かなくなった。おそらく大きなけがはしていないと思うが、無傷とは考えにくい。

例えば彼が坂道好きの変態青年でも、このまま放置するのは人としてまずいよな、と、僕は心の中で呟く。ちょっとだけ躊躇したのち、

思い切つて叫んでみた。

「だいじょうぶつすか！」

男はゆっくりと起き上がると、僕を見上げて大きく手を振り、歯を見せて笑つた。緊張感のない動作が妙に元気そうに見える。息を切らせてこちらへやってくる青年　ついに坂道ダッシュ十本達成だ　を観察すれば、やせ形で草食系の体躯。見た目からは、坂道学会の方が似合いそうだ。

僕の目の前まで来ると、彼は「ご心配をおかけしたようで、すみません」と軽く頭を下げた。僕より十歳くらいは年上だろうか、日本人離れした目の色と少々変わったデザインの服装、それに先ほどまでの奇行を除けば、ごく普通の青年だ。除く部分が多すぎる気がするが。

「いえ、無事そうで良かったつす。……で、そこ、通りたいんで、どいてくれると嬉しいんですけど」

「それはすみません」

青年はそう謝つたが、身を引くようすは微塵もない。何だかやけに興奮した彼の様子に、僕の方が引きそうになる。頭を下げながら目を輝かせるつてのはなかなか器用だ。

「あの、ひとつ聞いてもいいかな」

「はい？」

「この道は、何て言うものなの」

「ミチ？」

誰が何と言おうと、道は道だろうに。面食らつて周囲に答えを探すと、青いへキサが立っている。白抜きで並ぶ三桁の数字を、僕は読み上げた。

「……県道286号線、ですかね？」

「ケンドー？」

鳩が豆鉄砲を食つたような顔で、青年はまばたきを繰り返す。彼が期待した答えとは違つたらしい。

「そうじゃなくて、この、道路が斜めの状態は何とこのかを知り

たいんですが」

彼の右手が、けさ架けのように斜め下へと滑る。説明してくれたようだが、正直、ますます何を言っているのか分からなくなった。

坂道マニア、やばいよ。

「あ、怪しんでますね。……まあ、気持ちによく分かります」

引きつっていただろう僕の顔を見て、青年は苦笑いする。彼はクロトと名乗り（僕にはそう聞こえた）、人当たりの良さそうな微笑みを浮かべたまま語り出した。

「こつという斜めの道路がないところから来たんです。おれ 僕が住んでるのは、とにかく真っ平らなところなんですよ。斜めに削られた地形ならいわけじゃないんですけど、道路を斜めに造るっていう発想自体がないんです。それで、珍しくて、はしゃいでいたわけ」

「ああ」

クロトに真顔でまじまじと見つめられて初めて気付いたが、彼の瞳はきれいなとび色だ。ならばきつと、ごく最近に外国からやって来た人なのだろう。坂の上り下りという謎の行動の意味も、初めての坂道をめいっばい体感したかったのだと思えば、不自然さは八割程度までは減るような気がする。それでも、いまいち腑に落ちない部分は残るけれど。

さて。

クロトが知りたかったのは、『斜めに作られた道路』を何と呼ぶのか、だ。それを答えてやれば、僕はこの場から解放され、家に帰ることができる。

「『さかみち』です」

僕はクロトの後ろへと伸びる下り坂を指差して告げた。クロトは、何度かさかみち、さかみちと確認するように繰り返し唱えた。そして、ふと振り向くと、「坂道ってのは、いいですね」と笑う。屈託のない笑顔に、僕は一瞬だが、坂道学会に入ってもいいかなと思っ

てしまったくらいだ。

「そ、そうすか？ 登りなんか辛いだけっすよ」

「でも、それ以上に下りるのが気持ちいいですよ。登る苦勞を忘れてしまうほどに。……こうして、高低差のあるところを当たり前のように歩くことができるっていうのは、幸せなことなんです。君はそうは思わない でしょうね。まあ、そのうち分かる日が来るかもしれませんし、来ないかもしれませんが」

クロトはなぜか複雑な表情で語尾を濁したが、すぐに氣を取り直したようだった。

「じゃ、僕はそろそろ行きます。戻って、坂道について教えてあげたい人がいるので」

坂道情報を共有したい仲間がいるということだろうか。いや、そもそもクロトの地元には、坂道というものの存在すら知らない人の方が多そうだ。どう考えても万人受けするトピックスではない。野暮だと思いつつ、僕は尋ねてみた。

「教えたところで、喜ぶんすか」

「さあねえ。ちょっと変わってる人だから、食いついてくれると思うんだけどね」

「相手って女の子だったりします？」

クロトは、いやあ、とか言いながら頭を掻いていた。なぜそんなに照れるんだ、と突っ込もうとしてクロトを見ると、なんとも幸せそうな表情をしている。

坂道が縁で結ばれる男女、ねえ。

氣付けば、つられて僕の頬も緩んでいた。

クロトが去った後、僕も坂のてっぺんに立ってみた。いつもは自転車で一氣に下る道。眼下に広がる風景はいつもよりもきれいに見える、何度も何度も駆け下りていた彼の気持ちが分かるような気がした。

僕はおもむろに自転車を停めると、彼がしていたようにスタートを切った。

県道286号の男（後書き）

坂道を駆け下りるベルルックと、それを待つグロットが書きたくて出来たお話です。

坂道うんぬんは、「坂道学会」を知って以来書いてみたかったモチーフでした。

公開した当時は、設定的に無理があつて話に入り込めなかつたという感想をいただきましたが、私もそれはそう思っています。ただ、愛着があつて改稿などはしたくなかつたので、そのまま公開しています。

つたない物語を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7852x/>

坂道の効果に関する最新知見 ~ 女性研究者を対象として ~

2011年10月21日12時11分発行